
魔法系男子と自滅的彼女

ろい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法系男子と自滅的彼女

【Nコード】

N3445Z

【作者名】

ろい

【あらすじ】

世界のどこかで僕はいる。

ここは魔法や異能が当たり前の世界、パラレルワールドとでも言うていただきたい。

そして、僕の異能を紹介しよう。

対象に物事を依存させる、それが僕の異能「依存症」だ。

そんな世界で、何をする？

これは、少し不自然で不思議な物語である。

1 「彼女に向けての単純な。」（前書き）

お友達募集中です

仲良くシてね。

なお、この作品はpivivにも投稿されています。

こちら <http://www.pixiv.net/novel/show.php?id=453214> からどうぞ。。。

1 「彼女に向けての単純な。」

1

読んだことは多々ある。

主人公が突然異能に目覚め、そこから複数人の女の子たち（つまり、ハーレム状態）で展開していく学園異能バトル漫画を。面白い物も数多く存在し、逆につまらない物も少なくない。しかし、世に出る学園異能バトル漫画の中で特に売れるものがある。それは、大抵が主人公の能力が限度を超してチートか、ある特定の条件が揃えばチートか。この二つに一つが大半を占めている。なぜなら、まあなぜなら、と言えば理屈っぽい見解を述べているような気もするが、これはあくまで僕の個人的意見であって総合的な事を述べているのではない。なぜなら、やはりその方が気分的に読んでいてスカツとするからではなからうか。強い必殺技で敵を圧倒したり高度な頭脳戦で勝利を収めたり。

言うならば、気分がいい。

特に僕は これも個人的意見のため無視してもらっても構わない
そういう物語の序盤が大好きなのだ。初めは弱い主人公が最強の能力に目覚めて悪い奴をぶっ飛ばす絵はいつ見ても気持ちのいいものである。

反対に、そのような物語の後半はあまり好きではない。主人公が強いと自然と敵も強くなるから、主人公の味方では太刀打ちできない。力不足もいいところだ。と、そんな感じで落ち込む味方の肩に手を置き主人公は大抵こんな台詞を言う 「あとは、俺に任せと

け！」そして俺は片手を上げた。大事な仲間とこの場所を護るため的な。その場面自体はそんなに嫌いではないが主人公を目立たせるために敵を異常に強くするというのが嫌いなのだ。次々に強い敵を出していけばいいみたいな、そんな空気が嫌なのだ。

そんな中で何十、何百と学園異能バトル漫画を読破してきた。幾千、幾万と学園異能バトル小説を修読してきた。

おそらくは、この国で最もこの手の作品にくわしいだろう。いや、くわしくなっているはずだ。全ての作品のあらすじを二百文字程度で語れるほどに。

というのが、僕の裏設定である。

決して表舞台には立たない裏の設定。現実には存在しえないあり得ない設定で、他ならぬ僕が最も望む設定だ。

こんな、くだらない人間でいたかったのだ、と。

こんな、普通の人生でよかったのだ、と。

そんな事を言えば引かれるだろう。「夢見てんじゃねーぞ、死ね」の様な酷く辛辣な言葉が飛んでくるに違いない。言葉の暴力だ。暴力反対。

だけど、仕方が無い。僕はこの物語の主人公で、女の子の中心にいて、チートキャラなのだから。決して普通の人生を送れるはずが無いのだ。

僕は物語の主人公なんだから。

おそらく僕の描写もそのような物語にありきたりな格好をしているのだろう。目つきが悪く、無駄に髪の毛が跳ねていて、友達が少ない、勉強は出来るがテストを真面目に受けない、むしろ受けに行かないような不良少年で。そのくせ、女子にはモテている。

意味が分からない。なんだその超人は。チートにも程がある。ふざけるなど言いたい。苦しさから逃げ続けて、楽しさだけを得る人生がそんなに都合が言い分けないだろう。人間をなめるな。主人公職をバカにするな。

僕は毎日誰とでも隔てなく接しているし、勉強もテストも真面目にやっている。寝癖はちゃんと直し、目つきだって悪くない。当然女子からモテる訳が無い。

だけど、それがいいと思う。それでいいと思う。そんな超人チート人生になんのやりがいがあるというのだ。よっぽど、普通に生まれて、普通に育って、普通に勉強して、普通に働いて、普通に泣いて、普通に幸せになった方が人生楽しいはずだ。苦しんでこそその人生だろ。

そもそも、そんな人間が物語の主人公になれるわけが無い。女子に危険が迫ったらすぐに助けに行くなんて。裏を返せばただのストーカーじゃないか。前に述べたような主人公像を描いた人は頭が終わっている。頭が腐っている、死んでいる。

だけど、それも仕方が無いのかも知れない。

なぜ僕が主人公に選ばれてしまったのだろうかなんて、考えるだけ無駄である。

理由は単純。僕が、チートな異能を持っていたせいだ。

どうせ、主人公がチートなのはある程度確定していたのだから。

話を整理しよう。

いや、整理すべき話が全く書かれていないのだから整理も何も無いのだが。しかし、話を整理しなければこれからの物語を語る事も不可能となる。よって現状を報告しよう。

ここは、異能なんて当たり前、魔法なんて日常茶飯事の世界だ。だけど、普通の世界と姿はそっくりだ。ユーラシアがあつて、オセアニアもあるし、アフリカ、アメリカだって普通に大陸としてある。極東の小さな島国だって普通に存在している。

だけど。大昔から異能、魔法は研究開発されていて、約百年前には既に文化として成り立っていた。生活の根本から違う、生活の基準からずれている。まあ、普通の世界とは完全に別物だ、と認識していたできれば幸いだ。

そして、僕についてだ。

僕は、ウィズリー・リベリスト。現在ドイツに住む十六歳の男だ。現在進行形で平均偏差値七十六を誇る、『聖ダイア魔法学校上級校』の一年超特待生クラス。通称SSSクラス。に通っている。今その道すがらを。通学路を通っている。しかし、毎朝通う学校なのに足が重い。僕は学校に行きたくないのだ。足が重いという表現もここでは不適切なのだが（超特待生限定の学校から支給される超電磁浮遊登校靴、いわゆるフェザーブーツ。歩かなくても自動に学

校に向かってくれるという靴だ）気分的な問題で。

第一、僕は何一つ努力などしていないのに。生まれ持った才能だけでこんな特待生になってしまった事に苛立っている。もっと、僕じゃなくて。ほかの周りにいた、必死で努力に努力を積み重ねてこの学校に入学してきた人もいるというのに。何で僕なのだろうか。

第二に僕はこのSSSクラスで浮いている。理由としてあげるならば、素行が悪いとか、髪が立っているとか、黒髪だとか、目つきが悪いとか。例を挙げるとキリが無くなって来るけれど。おそらく最大の理由は「僕が男だから」で決定だろう。

そう、このSSSクラス。ウィズリー・リベリスト以外は全ての生徒が女子だ。全員女子、ただし一部を除くみたいだ。その一部が僕なのだ。浮き過ぎている。静かな大広間の中で大きなくしゃみをしてしまい、結果周りの人たちから異常な注目を浴びる。その感覚がずっと続くようなものなのだ。肩身が狭すぎる。

だからと言って授業をサボる事が出来ず（何より僕のせいでSSSクラスに入れなかった同級生の努力を無駄にしないため）こうやって、授業を受けに足を引きずる思いで足を浮かせながら、毎朝登校。と、その時。

「あ、ウィリー君。今日も元気ないね。どしたの？」
近づいてくる女子、エレナ・キャロットがいた。

「あ。えっと、私のこと分かる？ 同じクラスのエレナ・キャロットです」

外見は知ってる。

金髪で、若干のウェーブがかかったロングヘア。目は丸く、耳にはピアスがある。身長は僕と同じくらいで声はわりかし高い。外見はそんな女子だ。

しかし、僕はコイツの内面の事をよく知らない。あまり話した事さえないのに僕のあだ名を知っている。まだ五月だぞ？ こっちがどういう対応をしているのかが全く分からない。なので、しばらくだんまりを決め込んでいると彼女は、

「ウィリー君、そろそろ馴染んだ方がいいんじゃない？ 確かに男の子一人はつらいと思うけど。でも、やっぱり友達の一人や二人は必要だと思うよ？」

そんな事を笑顔で言ってきた。

かなり余計なお世話だ。僕は好きで一人にいるのに。SSSクラスに入るのに、何もしてこなかった、僕への罰として。その前に、お前の方こそ馴染めてない様な気もするぞ。僕は無視をし続けた。

「ね、ウィリー君」

と彼女は一つ間をおいた。一体何を言い出すかと思えば、

「私と友達になってよ
だそうな。」

「……は？」

展開が速い。もうちょっと順序よく、手順を踏んで友達同士になれるんじゃないのか？

「私の能力知ってる？」 『ウロホロス尾を噛む蛇』って言うんだけど。まあ言っていないから知らないと思うんだけど。私ね。その能力のおかげで

SSSクラスに入れたんだ。ウィリーと同じなの、何も努力しなくても、こうやってこのクラスに入ってしまった事。とても後悔してるわ。どう考えても私なんかよりよっぽど優秀な人がいるのにつてだつて私勉強出来ないもん。先生が何言ってるのかが全然分かんなくて、問題とか当てられても答えれた事なんて一度もないし。そのおかげでクラスの皆からは笑われちゃうし。うんざりなんだよ、本当は。何で自分がこんな分相応な位置にいるのかなあって。そのことを考えない日は無かった。でもね」

と。彼女は言葉をついだ。でもね、と確かめるようにこつちを見ながら。

「ウィリー君みたいな、私と同じ境遇の人がいて……ってあれっ！？ 話し聞かないのっ！？」

しかし、僕にそんな話を聞く意味も意義も時間もない。実際授業の始まる五分前だったので、そそくさと歩を早める。

「ねえっ！ ねえってば！ 話し聞いてよう！」

彼女は若干泣きそうな顔で僕を追いかけた。しかし、僕は前を向いたままこう答える。

「聞かない。そもそも僕はそんな悲しい奴じゃない」

と。嘘を、虚言を吐いた。

「嘘」

だが、彼女はそれでも。食い下がろうとはせず、僕に食らいつく。

「あなただつて、私と同じじゃない。一人で、独りで。今までも、これからも。ずっとひとりぼっち」

「心外だな。君の目からは僕がそういう風に映るのか。だとしたら

いい眼科をお勧めするぞ」

「だって、あの日……ッ」

少しうざいので、ため息交じりに振り向き「じゃあ、仮に」と言
って彼女を エレナ・キャロットを睨んだ。その際、彼女はぶる
つと体を震わせ身じろぎする。

「じゃあ、仮に。僕が本当に君と同じ境遇だったとしても、僕は絶
対君とは関わらないだろうな。今までも、これからも。だから、関
わるな」
忠告するように、言う。きつく、強く、咎めるように言った。彼女
にはなく僕に対し
て。

すると、流石にあきらめたのか。それとも、僕の言葉がショック
だったのか。

「そう……」

彼女は少しうつむいて呟いた。

彼女の足元には無残に潰された一匹の蛾が蟻に運ばれている。

2 「いじめ以上に快感を。」（前書き）

お友達募集中！

現実世界にはお友達なんていないのっ！
ってなわけで2話目あげますぽ。*。*。
*。

2 「いじめ以上に快感を。」

結果として言えば授業には間に合っていた。その後、動かないエレナ・キャロットを置いて行き、学校に着いたのが授業の四十五秒前。一時間目の物体空間移動の実習の途中でエレナ・キャロットは教室に入ってきた。周りからの奇異な視線を当てられている辺り、どうやら彼女の言っていた事もまんざらではなく、明らかに女子から八布られている。

僕も、クラスのたった一人の男子なので実習やら実験やら大会やら。そのような班での共同作業、あるいは対抗授業的なノリはしていかかなり不愉快だ。どう考えても避けられている。最たる例はある日、僕が諸事情で遅刻したときの事だ。僕が学校に着いたときは既に二時間目の始まりのチャイムが鳴り終えた後で急いで教室に入ったときだ。僕は恐るべき光景を目の当たりにした。

「誰もいない？」

慌てて今日の二時間目の授業を確認したところ、女子らしい、かわい丸っこい文字で『しゃかい』と書いてあった。（平仮名がイラッと来る）なるほど、社会で移動教室は珍しい。とりあえず目星の着いている教室を探した。図書室、CP室、視聴覚室、他クラス共同かもしれないなかったので講堂、多目的ホール。もしかすると抜き打ちテスト、という可能性もありえるため試験室まで探した。

だが、どこにも我がSSSクラスの女子たちはいなかった。そもそもこの学校は無駄に広い。外観が既に城みたいで、内部は地下二階から四階まである。いや、学校に地下施設造るなよ。空気が淀んで授業に集中できないじゃん。

とはいえ。何かもう探す気も失せてしまい、僕は教室に戻って自分の机で寝ていたら、女子たちが帰ってきた。彼女らは僕を見るなりかなり気まずそうになり、全く目をあわせようとせず、それぞれの席に座った。その後、僕は一人の女子に聞いたのだがどうやらその日は社会の先生がバスタブから出れなかったらしく（なんつー理由だ）、代わりに家庭科があり家庭科室にいたと言う。

「う……ごめんなさい。せめて、黒板に書いてたら……」

その子の言うとおりである。社会と思って書く特別教室を探し回る奴が、校舎の端っこにある家庭科室など調べるはずもない。

まあ、どうせ料理でも作っていたのだろう。魔法クッキーとかその辺の。そんな授業だったとしたら逆に好都合だったかもな。

けど、せめて伝えておいて欲しかった。社会から家庭科に変わった、とかその程度の伝言でもよかった。

そんな事を思っているとき、ある女子を中心とした数人が僕に近づいてこう言った。

「あれー？ あんた来たの？ 不登校になっちゃったかと思って黒板に移動教室先書くの忘れちゃってたわ。メンゴ、メンゴ」

ちなみに、このエピソードは僕が初めて本気の殺意を抱いた瞬間でもあるのだが。

……ん？ この時、僕に事情を説明してくれたのって誰だったけ？

と、その時。

「あれー？ あんた来たの？ 不登校になっちゃったかと思って実習に必要なプリント全部捨てちゃってたわ。メンゴ、メンゴ」
なんかものすごく最近聞いたような台詞が聞こえた。つーか、あのときと全然変わらない台詞じゃんこれ。

「え……そ、そんな……。じゃあ、私どうすれば……」
これも聞き覚えあるぞ。誰だっけな……えーと……。

「いや、考えるくらいなら目で確かめちゃえ。百聞は一見に如かずだ。この場合はちよつと意味が違うけど。」

「どうすればって。あたしに聞かないでよ？ あんたの問題でしょ？ 物質創造魔法でも使って紙を召喚すればいいじゃない」

「でで……でもっ……。別に捨てなくてもっ……！」

「ああー。一人称が私の方がエレナ・キャロットで、あたしの方がアルヴィーナ・ブックマンか。」

アルヴィーナ・ブックマン。エレナ・キャロットと同じ金髪で、しかし髪型はポニーテイル。つり目で胸も大きく大層な自身家。成績優秀八方美人。このクラスのトップ的な存在で弱い者いじめが得意。事あるごとにエレナ・キャロットに嫌がらせをしている、いわば悪そうな奴だ。

「何よ。遅れてくるあんたが悪いんじゃないの？ なんであたしに突っかかるわけ？ わけわかんない」

「だって……………」

「『だって』だって！」「キャハハハ！」「エレナさ、ルヴィーに最近反抗的よねー？」

と、アルヴィーナ・ブックマンの周りにいつもいる女子数名は口々にエレナ・キャロットを非難する。そして「『だって』だって！」
「だって？ 何だそれは、ギャグのつもりか。」

そして、今にも泣き叫びそうなエレナさん。涙腺が結界寸前だ。

「……………あ、そつかあ あんたさあ？ プリント程度の物質さえ召喚できない落ちこぼれだもんねえー。無理言つてメング、メング。仕方がないからあたしが創つてあげるわ。有難く思いなさい」
むかつかない、あいつ。どうやって マーク表現したんだよ。そして、あの謝り方クセなのか？

実習担当の先生は寝てるし。やりたい放題だなみんな。

「……………」

エレナ・キャロットは泣く一歩手前で頭を下げてお礼の意を示した。……………普通、あんな事されたら頭なんか絶対に下げるべきではない。なぜなら、付け込まれてしまうからだ。

「……………何やってんの？」

アルヴィーナ・ブックマンは首をかしげる。

「え？」

エレナ・キャロットも同様に首をかしげた。すると、アルヴィーナ・ブックマンは地面を指差して「しないの？」と言った。何をしなくてはいけないのか、エレナ・キャロットには分かったらしく、

て。助けて。助けて。と、何度も何度も僕に助けを求めてくる。だけど、ダメだ。嫌なんだよ。僕はその中に入りたくない。関わりたくない。主人公みたいにヒーロー気取りで介入したくない。面倒なんだ。主人公職は。

僕が、そんな意味合いで取った行動　つまり、視線を逸らす。その瞬間、誰が一番最低な人間なのかがわかった。

彼女は、そんな僕の行動を見た瞬間、絶望的な目をして下を向いた。

何をエレナ・キャロットがしたのかは、目をずっと逸らしていたため分からない。だが、大人数の笑い声と、一人の泣き声はその状況を僕に正確に伝える。

しばらく経ってアルヴィーナ・ブックマンがもういい、と言ってエレナ・キャロットに

一枚の紙を手渡した。そこには本来クラスと氏名番号を書く欄が右上に設けられているのだが、既に氏名はEr en a C a l l o t t eと真つ赤な血文字で書かれていた。

* * *

とにかく。このままではエレナ・キャロットが家に戻ってくるなり、いきなり首吊り自殺でも図ったら大変なので、フォローを入れておく必要があるだろう。

僕のせいでもあるわけだし。

次の授業は移動教室のため全員足早に教室を出る。教室内には僕ともう一人、ずっと泣きっぱなしの奴だけが残った。

「……おい」

近づいて声をかける。別に遠くからでも良かったのだが、少しでも反省の意を表すため近づいているのだ。

そんな僕に、エレナ・キャロットは、

「あ、……」

何も言わなかった。ただ、こっちに視線を一瞬向け、すぐまた下を向いてしまった。

「……」

ごめんな、僕があの時助けに入ったらこんな事にはならなかったのに。助けてやれなくてごめん。僕が弱かったからだ。許してくれ。

とは、言えず。その場で立ち尽くしていたら。

「早く行ってよ。関わらないって言ったのそっちでしょ……」
拒絶されてしまった。ひどく、抵抗を示す彼女に、

「そうか」

と、無責任に味気ない感じで答えて、彼女に言われるがままに教室を出た。たったそれだけの事だ。たったそれだけの事なのに。

僕はどうしてこんな、やりきれない気分なのか。

そして、できる事なら合わせたくなかった焦点が、対物とばつちりピントが合ってしまった。ふむ、これが生物の性と言う奴か。見たくないものほど確かめるようにしてみよう。 どうせ、これ見たらオチオチトイレにも行けないだろうなあー、と言いながら怖いテレビ番組を、やっぱりどうしても見ってしまう感覚に近い。

つまり。

教室を出て数十メートル先にアルヴィーナ・ブックマンと不愉快な仲間たちがいた。何だあいつら。あんな所で待ち伏せみたいな、とおせんぼみたいな、廊下の真ん中で陣取りやがって。少しは通行人の気持ちってもんを考えろよ。

「ウイリー。あんたエレナになんか言ったの？」

アルヴィーナ・ブックマンは僕にそう聞いてきた。

「……」

無視。気持ちのいい位のスルー。

「ウイリー！ 何を話していたの？ 答えて！」

「別に」

「別に、とはあたしに言ってるの？ 言うようになったわね、エレナと同じ落ちこぼれのクセに！」

「あ、そ」

「何も言い返せないのねっ！ 全く持って、これだから無能は……。あたしが皇帝になった暁には、あんたみたいな愚民共は一生奴隷と

して惨めに扱ってあげるわ！」

「頑張つて」

「応援なんかしたつてあなたは国民投票する権利さえ与えないから無駄よ！　せいぜい一人で人権宣言でもしてなさい！」

「はいはい」

「さあ！　とまりなさいウィリー！　今とまるのならばあたしが将来住むであろう、お城の掃除ぐらいならただで働かせてもいいわ！　光栄に思いなさい！　国民榮譽しようものよ、きつと！」

「お褒めに預かり光栄ですエンペラー。いいから通してください」

「あーなーたーを、とおっせんぼっ！」
「バツ！」

「ウザっ！」

「いいからとまりなさいよ！」「そうよ！　ウィリーのくせに生意気だわ！」「ルヴィーの命令は絶対服従なのよ！？」「と・ま・れ！　と・ま・れ！　と・ま・れ！」

「はあ………」

行く手を阻まれた。面倒くさいなあ、もう。

「じゃあ、ブックマン。』座つていいよ『？』」

僕は彼女に座ることを許可した。

「なっ!? え」
すると、ブックマンは（初めて名前呼んだ）強烈に、地面に埋まるんじゃないか、と思うほどに迅速に、かつ従順に地面に座り込んだ!

彼女は必死に抵抗しようとするがとめられない。何度も立とうとするが本能的に座りたいと、思っているのだ。

「ルヴィー!?」「どうしたの!?」「立ってよ!?!」「早くっ!」
ブックマンの周りの女子たちは急いでブックマンを立たせようとするが。

「やめてっ! 立たせないで! 座らせて! 座ってたいの!」
ブックマンは彼女らの手を振り払った。

「一体どうしたの!?!」「立ってよルヴィー!?!」「こんな奴の言いなりになんかにならないで!」

「離して! 近づくなッ!」
ブックマンは吠える様に威嚇する。両手を思いっきり振りかざし、かなりの抵抗を見せる。

「分かったか、ブックマン。命令とはこうやって 促して使うんだよ。分かったら僕を通してくれ」

「嫌よッ! 通さないわ! そして、絶対に立たないわ! エレナとあなたは何を話していたの? さあ、答えて!」

何で僕がそんな事を言わなくちゃいけないんだ。

というか、どうしてブックマンはこうまでして僕を吐かそうとするんだ? 座りながら

の脅迫は全く怖くないんだぜ？

「……仕方が無いな。立たすぞ」

「ひいっ！？ や……………止めてください！ じゃない！ 座つてたいのよ、命令しないで！」

ブックマンは怯えたり強気になったり大変である。

そもそも、なんか緊張緩わかないんだよな。座つて脅迫してくる女子と無視したい男子つて、絵的にふざけてる様にしか見えない。

そろそろか。

「ブックマン」

「な 何よっ？ うっ、あたしに何か言いたい事……………はあ……………でも、ああ…あるの？」

「座つてて、どんな気分だ？」

僕のその質問に対して、ブックマンは体を震わせた。

おそらく、もう分かってしまったのだろう。自分が座つていることに対して抱いてしまっている感情について。

「……………っ！ そ……………それは」

僕の異能は『依存症』。まず、相手の名前（偽名、ペンネームでも可）を呼び、次にその相手に動作を許可する形で命令を与える。すると、相手はその行動に依存してしまうと言う、なんだからよく分からない能力だ。

一概にしてみれば使えなさそーな異能だが、これがかなりのチー

ト能力だったりする。

一つに強制力の強さだろう。例えば子供に勉強をさせても何も言わなければすぐに飽きてしまう。だが、子供を遊ばせて見ると親がとめない限りずっと遊び続け、泣く子供だっているだろう。

それと同じで。

つまり、『相手に強制的に行わせる事を一番好きな事にしてしまおう』異能。それが『依存症』だ。だから、相手の動きの主導権を奪うとは違い、「やめたくない」と言う思いも相手に植え付けるため、遥かに強制力を持たせてしまうのだ。

それと同時に。この異能のチートなところその二。

『依存症』の効果によって行っている行動は、徐々に相手に快感を与える。

つまり、やってて気持ちいいのだ。

生き物にとって、これ程チートな能力はないだろう。

と言うわけで。

おそらくブックマンは今、大変な状況にある、と思う。

まあ、彼女自身は段々と気持ちよくなってきたるので自覚はないと思うが。その様子を見ている周りの女子たちが大変だろう。

目の前で自分たちのボス的な存在が、カス同然の僕に思うように

扱われているからだと思う。

ブックマンの顔が赤く染まってきた。声も上ずってきている。

そして、ブックマンがとろけるような目遣いで僕を見てこう言った。

「きつ……気持ちいいね……。あっ」

「あっそ」

僕はそう素っ気無く答えて、ブックマンから視線を外して、『依存症』を解除してあげた。

すると、彼女は開放されるように立ち上がった！

……と、何か格好よく表現してみたが、実際は普通にゆっくりと立ち上がっている。まあ、表現の自由という権利もあるから多めに見てもらいたい。

「どっ！ どうして……？ もう少しだったのに……」

驚きを隠せない表情で首を傾げるブックマン。まあ、何がもう少しだったのかは分からないが、あえて言うことでもないだろう。

「ああ、ブックマン。一つ忠告しておくけど」

僕は思い出したように振り返る。ブックマンは身構えたが、顔が急に赤くなってもじもじし始めた。なんか見えて不快感が増す一方なので、手早く。用件だけを軽くまとめさらっと言った。

「僕とエレナを同じにしないでくれ。僕は彼女なんかよりも」と。
と。そんな曖昧な事を言った僕に、ブックマンは何か言おうとして、しかしそれを喉の辺りでぎりぎりとめて、結局黙った。

かなり、複雑な表情だったがさほど気にもせず、僕はさっさと移動教室先に歩いていった。背中にブックマンの不愉快な仲間たちの罵声のしかかる。

ふと、窓の外を見ると黒く厚みのある雲がなんともいえない雨模様を描いている。

2 「いじめ以上に快感を。」（後書き）

寒くなったね。
おかえり。

3 「プレゼントには名前と花。」 (前書き)

3話目でsう。

親指の爪が伸びてきていたい*。。。

あしたは雨降っちゃーよ。。*。

3 「プレゼントには名前と花。」

3

ダイア魔法学校上級校『図書室 第二分館』。

約三千二百？の敷地面積に四階建てに造られたこの建物には、さまざまな魔術書や儀式書、錬金術書、治療書などがある。大体の異能関連の書物はここに揃っており……と、言ってみたが要するに。馬鹿でかい図書室なのだ。（ちなみに第一分館は学校授業で習う異能関連の授業以外で使う参考書があり、本館は普通の大衆向けの本がある。どれにせよ、施設が馬鹿でかいのもこの手の物語に良く見られる光景だ。）

先ほどの授業が物体空間移動の実習だったため、そのまとめ活動として僕はある本を探している。

しかし、校舎も広ければ施設も広いと言う事で。

お目当ての本を探すのはかなりの重労働だ。

究極的に言えば僕は細かい作業が嫌いなのだ。もう、こんな大量な本の中で一冊を見つけると言うムズゲーにリタイア寸前の僕は、気晴らしに一冊の本を取ると。

「うん？」

と、誰かと取る本が被ってしまったらしい。誰だろうか。男子である確率はゼロ%で決まりなので、女子であることは確かなのだが。

「あああ。ウイズリー君じゃないか。これ、読むのか？」

「いやっ。お構いなく、どうぞ。……………って」
誰？

なんか、スミマセン。ほんとに。

「誰？」

ブロンドのショートカットに赤いリボン。整った顔と男勝りな口調と、……………誰？

「あああ。すまない。確かに、名前の知らない奴に自分の名前を呼ばれたら不思議に思ってしまうだろうな。私にはそのような経験がないからなんとも言えないが……………。気分を悪くしたなら謝ろう。ごめんなさい」

「スポーツ系ショートカットが居ないところという物語って進まないのか？」

「？ ははっ。ウイズリー君は面白いな。まあ、覚えていないのなら仕方ない。自己紹介する」

「あ、今の独り言だから」

一応、断っておく。変な目で見られてたからな。

そんな僕の無意味なフォローは、あっさりと「なるほど」の一言で消されてしまい、こ

の謎の女子は自己紹介を始めた。

「私はO型でふたご座。誕生日は六月十日で生まれはヘルシンキだが育ちはベルリンだ。好きな食べ物はクッキーとビスケット。最近日本の食文化にも興味を持っているな。特にセンベイとか言う奴が大好きなんだ」

淡々と説明していく。しかし、好きな食べ物偏りすぎだろ。なんでアメリカ・イングランド・日本の微妙に似てる食べ物なんだよ。どれかに統一しろよ。

「あとは、スポーツも好きだ。特にサッカーやフットサルが得意だな。ちなみに、スポーツの後のサウナ シャワーの流れは最高だな！ 身も心も洗われるぞ！」

目をきらきらして語ってくる辺り、よっぽど好きなんだろうな。子供みたいに無邪気なキャラだぜ。

とは、言っても。結局コイツが何者かは分かっていないのだが。

「で、名前何て言うの？」

コイツ自体は知っている。同じ教室だから何度か見かけているので、顔は覚えていたのだ。

ただ、名前を知らない。聞いた事もないだろう。

そして、目の前の女子は意外な事を言った。

「うん？ 妙な事を聞くなウィズリー君は。相手に自分の名前を言ったら婚約するんじゃないのか？」

「しねーよ。お前この十六年何を学んできたんだよ」

「まあ、好きな授業は体育だったな。それがどうしたんだ？」

「体育から婚約にはつながらねーだろ。名前なんていうんだよ?」

「体育というか、保健の方だな。スポーツも好きだが保健の授業もかなり勉強になった」

「あ、何? お前そういうキャラなの?」

「そつだ。そろそろ、欲求不満に目覚めてきたからトイレに行つて……」

「待て。お前がこれからする事に口を挟むつもりもないが。とりあえず質問に答えてくれ。」

「と、言つと?」

「今の会話の流れで察せよ! なんかアホみたいじゃないか僕たち!」

「思い出した! 好きな食べ物か!」

「断じて違つ」

「私の好きな食べ物ハミツキーとクリケットと先生だ!」

「全部近いけど意味合的には真反対の物体言つたなお前。『これは食べられません』すら書いてない固有名詞ばかりじゃねえか」

「おっと、厳しい突つ込みを入れられてしまったな。真面目に答えよ」

そして、彼女はまっすぐにこちらを向いた。

「実は私は名前がないのだ」

衝撃の事実。全視聴者（この場合の僕のみ）が驚いた。

「マジか？」

「マジだ」

「じゃあ、何か呼び名でも決めるか。クッキーとビスケットだったらどっちがいい？」

「えっ!？」

無名の彼女は少し戸惑ったような顔をする。

「えっ!？ って、何驚いてんだよ。名前がないなら名前を決めようじゃないかってだけだよ。何をそんな驚く必要があるんだ」

僕は若干あきれつつ言った。

「いや、初めてだからな。つい、嬉しくなったのだ……」

「初めて？」

「あああ。私は今のウィズリー君みたいに名前を尋ねられてしまったら、一応言わずにその場から離れることが多いんだ。名前がないと、親から見離された子供見たいらしいから。中には逃げ切れず答えてしまつときもあるのだが、答えたら答えたでいやな目にあうからね」

「いやな目？」

「言った通りだよ。いやな目で言ってくるんだ。「コイツとは関わりたくない」とか「コイツは気味が悪い」とか。目は口ほどにも物を言うんだよ」

「視線だけで分かるのか？」

「いや、厳密に言うとそうじゃない。視線もあるけれど会話中の動作や発汗の様子、声の調子とかを総合して相手の心の声を読み取るんだ。」

「それがお前の異能か。なんて名前なんだ？」

「あああ。ウィズリー君、これは異能じゃないよ。普通に、何十回、何百回とこんな会話をしていたら自然と身につくものだ」

「……お前、すげえな」

「うん？ あははっ！ いや、ウィズリー君の方こそすごいよ」「なぜか笑われた。僕の方がすごい、だって？ 一体何の根拠があつてそんな事を。」

「根拠はあるよ」

「……まだ何も喋ってないが。どうやら心をホントに読んでいるようだ。」

「だって、普通すごいなっていう人は、嫉妬や怒りや謙遜の感情が読めるんだけど、ウィズリー君はホントに、心からすごいって思ってたんだ。それに」

静かに持っていた本を棚に戻して言った。

あ、読まねえなら僕に貸してよ。

「名前の提案って、初めてで。なんだか温かくなった、と言っか。なんと言っか。妙な気分になってしまっているのだ」
そんな事を恥じも臆面もなく言っ彼女に僕は。

「じゃあ、どうするんだ？」

「ふえ？」

「ふえ？ て。そんな声も出せるのか、お前。」

「名前だよ。クッキーにするのか、ビスケットにするのか」

「それ以外の選択肢は？」

「ない。それ以外はお前に何一つ関連していないからな」

「じゃあ、センベイ……」

「そんなフィンランド人がいるかっ！」

「なんで、クッキーとビスケットは良くて、センベイはダメなのだ？」

「うっ。そういわれると全く言い返せない！」

「とりあえずっ！ どっちにするんだ？ クッキー・ビスケットなのか、ビスケット・クッキーなのか。」

「センベイ・センベイがいい」

「「ら、同じ言葉を繰り返し使うとアホらしくなるからやめる。もう、強制で決めるぞ?」

「いや、選択肢が二つの時点で強制だと思っただが」

「黙ってる。じゃあ、語呂の良さにビスケット・クッキーで決定す……」

「やったあ！初めての名前が出来た！嬉しい……。私はビスケット！ビスケット・クッキー！」

ビスケットは決定した瞬間飛び上がって大いに喜んだ。

「順応早っ!」

その順応さも目を張るが、彼女の喜び加減に一番驚いた。

「ありがとう、ウィリー。君は私なんか名前を与えてくれた！感謝するよ!」

「いや、いいよ、礼なんか。そんな好きな食べ物並べた僕の安直なネーミングセンスでよく喜べるな、お前」

僕がある意味感心していると、

「お前じゃないぞ。私は……」

「あー、はいはい。そんな好きな食べ物並べただけの僕の安直なネーミングセンスでよく喜べるな、ビスケット」

「えへへ。褒められてるみたいで、嬉しいなあ!」

「ほう、今のが褒められていると勘違いしているのならば、僕の紹介する即刻脳外科医に直行しろ」

しかも、段々キャラ変わってきてるし。

「いや、行きつけの脳外科医があるからそこに行きたい」

「行きつけあるの!？」

「週に一回は行く」

「あつそ。じゃあ、いつてらっしゃーい」

「うっそぴょん」

ビスケットは手を耳の上に当てて、ウサギの耳まねをした。ウインクも一緒になってキモさ百倍やがな。

「だから、キャラ変えんなっつーの」

「うん? 地の文で急に関西弁を使い出す人に言われても、直そうという気には全くなれないな」

「……ごもつともで」

そんな、会話を続けていると。僕の耳が自動的にシャットダウンのプログラムを組み上げそうな、聞き覚えはあるが忘れて居たい声が聞こえてきた。

「ウイリー! さつきはよくも逃げてくれたわね!」

出たよ。アルヴィーナ・ブックマン。今回は一人か。さつきので友達に裏切られたのか? 悲しい奴だ。当然と言えば当然の報いだが……。まあ多少哀れに思う位だがな。

「ウイリー、他人に対する説明酷いな」

というビスケットの突っ込み（だから、地の文を読むな）を無視して、

「あ？ いつの話だよ。昔のことばつか気にしてたら大きな人間になれないぞ」

「愚問ね」

そして、「COMMON行くもんね。」と、ブックマンは背筋が凍りつくぐらいの低レベルなギャグを言ってこっぴどく答えた。ちなみにビスケットは若干笑いそうになっている。なんだこの低レベルな奴らは。早く帰りたい。

「私の胸の大きさは既に全ての女性の平均より二段階上なのよっ！」

「あああ。身長が二メートルもあればそのぐらい普通だな」

訳の分からん謎の突っ込みを入れるビスケットにブックマンは、

「はあ？ あんた誰よ？ 同じクラス？ 何？ その胸、ホントに女子なの？ そして私の身長は173cmよ？」

「私の名前はビスケット・クッキー。まあ、私の名前を知らないのも無理はないな。ちなみにおっぱいは家に置いて来た。運動するときはかなり邪魔だからな。ちなみに私の身長は168センチだ」

こいつら、頭大丈夫か？ とりあえず、僕の身長は166センチ……あれ？ 一番低いじゃん。

「ビスケット・クッキー？ あははははっ！ 変なネーミングセン

スね。ただすきなたべ物並べただけじゃないの！ 一体誰がそんな名前考えたのかしら？ そいつの親の顔が見たみたいわ！」

……親の顔でいいのかよ。

「馬鹿にするなよ、アルヴィーナ。名前を付けてくれたのはウィリ―だぞ……？ いくらお前の脂肪だらけの頭とおっぱいでどれほど思考を巡らせたとしても、ウィリーのネーミングセンスには勝てないんだぞ？」

おい、胸に知的能力はないぞ。それに早速ばらしやがった。言っ
なよ、ビスケット。結局馬鹿にされるの僕なんだからな？

「え？ そうなの？」

ブックマンはおそらく僕を馬鹿にしまくった拳句、笑い死にそうになるな、と思ったら意外と驚いたような顔で僕を見た。

そして、顔を背けたブックマンはちょっと赤くなりながら。

「……い、いい名前じゃないの……」

と言った。いや、だから頭おかしいって。好きな食べ物並べただけなんだって、ホントに。

「じゃなくて」

ブックマンはそう前振ってもう一度僕を見た。

「あんだ、その能力一体なんなのよ？」

「そのつてどの？ いきなり指示語を出されても前文にそれらしい該当する語が無いから、僕にはよく分からないな」

しらばっくれる僕。聞かれている事は分かっているけど、なるべく秘密にしておきたい。

そしたら、ブックマンはむくれて、

「むぐ！ だから！ あなたの能力ってなんなのよ！？ さっき私に廊下で使用した奴よ！」

「ろ……廊下で使用………？ ウィリーとアルヴィーナはそんな関係なのか？」

「ちよつと口を閉じて鼻だけで呼吸してる、妄想ガール。あれは、だな」

僕は一度回りを見て状況を確認して 誰も居ない。……まあ、このアホ二人には言っても問題ないだろう。ちらつとビスケットを見ると僕の心を読んだのか、若干不機嫌そうな顔をしている。何か文句でもあんのか。アホなのは事実だろうが。

「えー……と」

いや、やっぱり言うのはやめて置こう。

そもそも、僕はこんな異能に頼らずに生きて行きたいのだ。だから、普通はあんな場面で依存症は使うべきじゃなかったんだけど……。なんとなく、使いたかった。なぜか、ブックマンを懲らしめてやりたかった。

……？ 何でだ？

理由が、見つからない。

「いや、やっぱ言えねえな。こればかりは」

「ふーん。なら、いいんだけどね」

そんな、答えても無い僕の答えに。ブックマンは咎めもせず、素直にうなずいた。

「まあ。ウィリーにもいろいろあるもんな！ よく身を引いたなアルヴィーナ。お前の脂肪だらけの脳みそとおっぱいにも、多少の人間的なスキルが備わっていたとは。いやはや、私は安心したぞ！」

「言ってる貧乳腐れ売人が」

「やんのか爆乳下品牛が」

「極貧淫乳クソビッチ」

「汚乳牛ホルスタイン」

お……おい。急に口ケンカし出したぞ。

「死ね」

「逝け」

「ずっと死ね」

「メツチャ逝け」

「ブスブスブスブスブスブスブスブスブスブスブスブスブス」

「ドベドベドベドベドベドベドベドベドベドベドベドベドベドベ」

「うっさい！ あんたなんかただのカス！ ブス！ 貧乳クソファ

ツキンビッチ！」

「おやおや。どうやらそれ程度の悪口しかたたけないようだな？
まるで子供のケンカでちゅねー？ 自分のおっぱい飲みたいんでちゅか？」

「~~~~~！ 言わせておけばグチグチとお……！
あんななんか床を一生舐めればいいのよ！ 自分の唾液で学校でも洗えばいいわ！」

「いや、それちよつと汚い。発想が汚い。気持ち悪い。近寄るな。
キモイキモイキモイ」

「そして、あたしにこう許しを乞うのよ！ 『ごめんなさい許してくださいもうしませんすみません。私は卑しいメス豚です。メスのクセにおっぱい小さくてごめんなさい。何でもします。トイレの床も舐めますから許してください』 って言いなさい！」

「いやだ。それを言うなら『おい？ 許せよ？ 許さねーんならマイサンぶち込むぞ？ てめーみてーなメス豚でも可愛がつてやるんだから感謝しろよこの牛女！』と、ウィリーが言うべきだ」

「僕なの！？ いやだよ、絶対言わないよってブックマン！ なに変な顔してんだ！」

「え、え。えっ、ええええ！？ ちちち……違っわよ！ 初めてだから中がいいとかつ、そんな事全然考えてないわよ！ 何期待してんのよ！」

「あああ。そうかアルヴィーナ。実はお前ウイ」

「言・わ・な・く・て！ いいからっ！ それ以前にそんな訳無いから！」

ブックマンはバスケットの口を塞いだ。口つつーか、首の気道塞いでる感じだ。

「く！ 首しま……っつて！ ん、んんんっんはあ！ いいいいいつ！
イクっ！ イクううううううう！
！！ イっちゃうの
！！」

「気持ち悪い声を出すな！ 首を締められてんにイクって何だよ！
！ 普通首は落ちるだよ！」
なんか、もうダメな気がするぞお前！ 完全にR 指定だぞ！

「あああ。そう言えばそうだった。間違えてしまったぞ。鋭い指摘、感謝するウイリー！」

しかし、僕の指摘を受けた直後にバスケットは素に戻っていた。
切り替え早えーな……。

「ちよっ！？ 全然締まってないじゃない！？ なに言ってるのよ、逝っっちゃってんのよ！」

そんなバスケットの態度の急変に驚いて、ブックマンは絞める力を緩めてしまっ。

「え？」

その僅かな隙を逃さずバスケットはブックマンの腕をすり抜け、そのままブックマンの腕を引き、頭を押さえて。

「締まってるのは、どっちだアルヴィーナ！」

「裸締め!?!」

「こいつらっ! 堂々と図書室で暴れやがって!

「かつ!? く……くる……じい……」

しかも、なんかやばそうだ。ブックマンがホントに死にそうな顔してる。

「はははっ! なんとも醜いメス豚だ! そのアへ顔、滑稽だ!

さあ、乳牛! 許しを乞え! 『ごめんなさい。これからは自分のおっぱいで生計立てます』と言っがいい!」

何そのよく分からない罰ゲーム。

「じっ……ごめんなさ……イ……。コレ……か……」

「うん? 何々? 『もっと、締めてください。気持ちいです?』?

はははっ! このド変態が。誰がお前のご要望に答えるかっ!」
鬼です。ビスケットさん。

「はははははっ! さあ! 悶えろ、苦しめ、喘ぐがいい! その身をかいか……っ痛い!」

「その辺にしとけ。ブックマンが死んでる」

僕はビスケットの頭を叩いてブックマンを地獄から開放してあげた。いや、なんか地獄に落ちきってるな。脱出不可能だ。そして、ブックマンから手を離しているビスケットが、「なるほど。意識が落ちると地獄に落ちるをかけているんだな。さすがウィリーだ。考える事が違う」などとほざいているがシカト。僕はブックマンの緊急措置を始めるために彼女に顔を近づけようとした。

いや。待てよ。

展開早くねえか？

「流れ来た

！！！！」

「あ、ブックマン目が覚めたか。良かったなあ。大事に至らなくて」

「はあうー！！ しまった！ まだしてなかったのにテンション上がって地獄から上がってしまったわ！」

「…………？ 何言ってるんだお前」

「うん？ なるほど。テンションが上がるのと落ちていた地獄のそこから上がって来たをかけているのか。やるなホルスタイン」

「よし。なんか思いのほか元気だし、保健室には行かなくて大丈夫だな。」

「あ、ちよつとウイリー。無視しないでくれるか？」

「え？ ほ…………保健室？ だ！ ダメよ！ まだ早すぎるわ！ ちゅーならともかくソレはまだダメ！」
かなり慌てるブックマン。

「ちゅーもダメに決まってるじゃねーか。話が飛躍しすぎだっ！」
というか、何の飛躍かも分からんのだが…………。

「はははっ！ そうか。私の目の付け所が良すぎてコメントに困っているのか！ それならばそう言えばいいものを！」

すると、ブックマンはまたも意外な反応を見せた。

「あらそう。ならいいわ。まあ、そこまで期待してなかったしね。しね」

「最後の二文字を繰り返すな。危ない奴だろお前」

とりあえず、突っ込むべき所に突っ込みを入れつつ、僕は時計を見た。すると、ブックマンもそれに反応して同じように時計を見た。

「よし、分かった。二人にも分かるように私が面白い一発ギャグを言つてやろう！ いいか？ 笑いすぎて死にそうになっても私に責任は無いからな？」

「あ、そろそろ授業が終わりそうね。あーいやだわ。こんなアホコソビに付き合つてあげたこの一時間が勿体無いわ」

なんだよ。若干楽しそうにしてたくせに。あの、お前の周りにいた女子たちと話してる時とは全然違う顔だったぞ？

「むかつくなー、お前。よし、じゃあ……」

「率直に言われた！ そうね。そろそろだわ」

僕とブックマンは顔を見合わせ、二人で頷いた。

「いくぞ、ウィリー、アルヴィーナ！ セーの、布団が……！！」

「とりあえず！ お前はいいから吹っ飛んでろ！！」

僕とブックマンはタイミング良く、足を突き上げバスケットを蹴り飛ばした。

「ぎゃすー！」

バスケットは他の反応は取れなかったのか、面白くもなんとも無

い妙な悲鳴を上げて本
棚を一つ、通り越す。

とりあえず、その時を表す語句が見当たらないので適当に擬音語
をつけよう。

ドッカーン。

4 「未来のいらない道しるべ。」

4

しかし、中々やってしまった様な気もする。今時の作品にドツカ
ーンは無いだらう。ヤッターマンでさえ『ドツギヤーン!』とかし
ているはずだ。

とはいえ、過ぎてしまった事なので悔いている場合ではない。そ
れよりも目の前の問題にそれがどう活かせるかが先決だ。これが、
後悔と反省の違いだと僕は思う。

思い返せば、僕はこんな事を言いながら。そういえば後悔ばかり
してきたなあ、としみじみ思う。こんなチート能力 依存症なん
か生まれ持ったせいで、失敗こそして来なかったものの、後悔ばか
りだ。反省の出来ない成功した事への後悔、だ。

ちなみに、今下校中だ。

結局あの図書室でのレポートは全く出来ていないため、家に持ち
帰ってやれと言われた。

(やらなくてもチートな異能のおかげで、留年と言う最悪な結果は
免れるのだが一応、やるに越した事は無い。むしろ、僕みたいな奴
が優先してやるべきじゃないのか? だからエレナみたいな勉強と
人付き合いの不得手な、いじめられっこが誕生するんだよ。)

あれ? てか何で僕エレナの事考えてんだろ?

関わりたくないって自分で言いながら？

「あ
」
噂をすれば。

少し先にエレナ・キャロットが歩いて（という表現は不適切だ。実際は超電磁浮遊登校靴を履いているから浮いて）いる。

距離にしておよそ二十メートル。この距離なら気付かれないだろうと思っていたら。

「ウィリー君」

彼女はこちらを向かずに僕の名前を呼んだので、びくつとした。後ろに目があるのかあいつは。

「……何で、分かった？」

堪忍したように僕は溜息をついて、エレナに近づいた。

「気配」

「あっそ」

「ウィリー君ってさ」

彼女はやっとこちらを向いた。多少の疲れが顔色から伺える。やはり、朝の一件が効いたのだろうか。

「実は、優しくないんだよね」

「……」

「そして、素っ気無いよね」

「よく言われるけど」

「しかも、私の事嫌いだよね」

「……どうして、そんな事を聞くんだったこいつは……？」

自分の事が嫌いかどうか聞くなんて、大概終わっている。

「いや……それは………」

「困ったら、有耶無耶にするよね」

「……」

「最終的に黙るもんね」

彼女は、僕を攻撃する。言葉で、態度で、視線で。

暴力以外の全てを使って、僕を攻め立ててくる。

その、攻撃から逃れようとする僕を、彼女はさらに攻撃し、追撃してくる。

「言うて」

その内、ウィズリー三等兵の戦闘機はエレナ大佐の爆撃機に、軽く捻られて墜落した。

「正直に答えて。ウィリー君は私の事嫌いよね？」

ウィズリー三等兵は墜落し燃え上がる戦闘機から必死に這い出る

が、

「……嫌い」

エレナ大佐に上から二千発の焼夷弾を落とされ、逃げる事も出来ず。

答えてしまった。

「……そう」

エレナ大佐は焦土と化した地面を儚げに見つめ、

「私は、好きだったのに」

そのまま、墜落した。

「え……？」

僕は、今エレナが言った言葉が理解できなくて聞きなおす。

「でも、もういい。ウィリー君は好きだったけど、私でないウィリー君は好きになれない。じゃあ、さよなら」

その、さよならが何を指すのかは分からない。

ただ、彼女とは二度と会えないような。

そんな気さえした。

そのまま、エレナはそう言ってすぐに道を変えて僕から離れていった。

僕は何だかやりきれなくなって、走って家に帰る。

速攻でご飯を食べて、風呂に入り、歯磨きをして、明日のレポートを適当に仕上げ、自室に入り、ベッドに身を投げた。

元々の原因は誰か。

そう言われれば、僕なのだろうか。

実行して、表向きの犯人はブックマンになるのだろうか。

だけど、結局は。僕のせいなのだ。

全て僕が悪い。

「もう、ダメだよな」

僕は、何て奴だ。

終わっているのは僕の方だった。

間に合わない。無理だ。もう、彼女は僕を許さない。

「……はあ」

後悔はしても、反省できない。

反省の出来ない失敗か。

こんなにも、立ち直れない物なのか。あまりにも重かった。早く、気付くべきだった。そういえば、そうだ。僕はずっとそうだったじゃないか。

「……寝よう」

電気を消して、部屋を暗くした。

自室のベッド。普段は落ち着いて健やかな睡眠時間確保の上なのだが。

今日は、眠れなかった。

* * *

とりわけ、朝と言う時間帯が大の苦手である僕は、大抵二度寝をしてしまう。しかし、毎日学校に通っているものから見てみれば、二度寝の恐怖とは相当なもので「あと五分……」とか言いながら最終的には五十分寝てしまっていたということが多々ある。

そうなくても遅刻しないように、僕は毎朝登校時間の二時間前、つまり五時半に目覚められる様に体がプログラミングされているのだが。

どうやら昨日は眠れなかったらしい。

一度目の起きた時間が七時過ぎていた。

「……眠い」

いつもの習慣で二度寝を始めようとしたら。インターフォンが鳴った。こんな時間に誰だろうと思っていたが気にもせず二度寝を続けようとした。

「は〜い。どなたですかあ〜」

どうせ、母が出るのだから僕が起きなければならぬ訳がない。

「朝早くにすみません。ビスケット・クッキーと言います。ウィリー君のお宅はここだと

聞いているのですが。合ってるでしょうか？」

……ビスケット？

「あらら、ウィリーのお友達？ 彼女？ ちょっと待っていてくださいね。あ、家上がる？ お茶でも飲むかしら？」

「いえいえ、お構いなく。まあ、私の説明はそれである程度合っているのです。ウィリー君を登校に誘おうかなと、思いました」

「まあ！ ウィリーにもこんなに可愛い彼女ちゃんがいる！ あの万年友達無しだと思ってたのに、ついに青春始めたのね……」

……なにやら凄い勘違いトークが玄関先で繰り広げられているような気がするぞ！

僕は急いでベッドから跳ね起き、着替えてお茶を飲み、歯磨き、顔を洗って玄関に来た。

「はい。よく図書室で会ってたんですけど、私の方から告白してみたら案外オーケー貰えちゃったりして……」

何の話をしているんだ、こいつらは。

「そうなの。なら、付き合い始めたのは昨日からと言う事なのね」

「はい、そうなります。今日、早速ウィリー君のお宅を伺ったのも私なりの礼儀として、お母様に挨拶でも、と言う訳ですね」

「まあ、嬉しいわお母さん。じゃあ、これから家のウィリーをよろ

しくお願いします。あの子、あれでもちよつと寂しがり屋だから、一人に余りさせないでね」

「分かってますよお母様。このバスケットが見事使命を果たして見せます！」

「ふふつ。面白いわね。じゃあウィリーを……」
母がバスケットに背を向けて、僕の方を見た。

「あら。ウィリー起きてたの。彼女ちゃんがお迎えに来てるわよ」

「何の話をしてるんだよバスケット。僕たちは昨日面識が出来たばかりじゃないか。付き合い始めたのは昨日だけど、それは人付き合いの方だろ。彼女って何だよそれ。つか、何しに来たんだよ」
質問攻め。

「いや、マジで何しに来たお前。僕の大事な二度寝を奪った罪は重苦しいぞ。」

「あああ。そういえばそうだった。ウィリーと自己紹介を交わしたのは昨日が初めてだったな」

「あら？ そうなの。でも、相手に名前を名乗ったら婚約と同義じゃなかったのかしら？」

「なにになになに？ 流行ってんのそれ？ 何で母も知ってるの？ 何処の民間伝承儀式なんですか。アボリジニやインディアカの人たちもそこまで行ってないよ。相手に自分の名前を名乗ったら婚約って無理がありまくりだろ。」

「もういいよお母さん。不本意だけどコイツが学校に行きたいって言うてるんだから、とりあえずもう行くから。赤飯とか炊かなくていいからね。そういうのホントやめてくれよ？」

「赤飯？ 何だそれは？ ウイリーうまいのか？ 何イタリアンバジル味なんだ？」

「日本の祝いの席で出される赤いお米だよ。それより、何イタリアンバジル味ってそれで既に、イタリアンバジル味として味が成立しちゃってるじゃねーか」

「はははっ！ ウイリーの突っ込みは朝から絶好調だな！ 若干、説明が長い気もするが……」

「うるさい。朝は調子が悪いんだよ。昨日も余り眠れなかったし」とすると母が、ふふっと笑って、

「やっぱり、ウイリーが言う通り、彼女ちゃんじゃない見たいね」
「当たり前だ。こんな彼女なら僕は精神疾患者として危険な牢屋に入れられてもおかしくないぞ。」

「今の突っ込み酷い」
ビスケットは僕の心内突っ込みを上手く読み取ったようで、さすが突っ込んできた。

だから、地の文を読むなっつーの。

「ここから見ると、兄妹みただわ」

「兄妹……？」

ビスケットがそう呟いた。

「どうやら、こいつは兄弟姉妹が居ないようだな。」

人間は自分に無いものに過度に反応するんだよ。

僕にも兄弟姉妹居ないけど。

そんな事を思いつつ、僕は玄関を開けて外に出た。

「じゃあ、行って来ます。」

「は〜い、いつてらっしや〜い。」

「行って来ますね。お母様。」

ビスケットは僕の母に深々と頭を下げ、玄関を閉じた。

「お前、僕のお母さんを『お母様』って呼ぶのやめろ。」

「え？ どうしてだ？」

「変な勘違いが起こるだろッ！ 見てることっちはとても恥ずかしいんだ。」

すると、ビスケットは僕の方を向いて少し微笑んだ。

「了解だ、お兄ちゃん。」

……。

「やっぱり？」

「お兄ちゃんどったの？　なんか汗びっしょりじゃん」

「どったのって。お前いつからそんなキャラになった。軸ぶれまくってんだけど」

「大丈夫だお兄ちゃん。お兄ちゃんて妄想してるから」

「おいっ。その言葉の中にどの程度大丈夫が含まれてるんだ。含有率ほぼゼロ%じゃねーか。」

「いや、軸がぶれてるから元に戻そうと思って」

「軸ごと叩き折ってんじゃねーか。ばっきばきだよ」

「ばっきばきなのか？」

「ああ、フルバッキだ」

「君なんてっ！　バッキバキにしてやんよっ！」

「やめろ。そのネタは既にかなり使い回されている」

「あああ。そうなのか。知らなかった。流石お兄ちゃんだ。物知りだなあ」

「句読点多いと棒読みみたいだぞ。もうちょっと感情の起伏こめて言えよ」

「わかった、お兄ちゃん。やってみる。……うわあ！　お兄ちゃんってやっぱり凄いんだねえ！　私感動しちゃった！　いろんな事を知

つてるお兄ちゃんって、かつこいいよ！ 凄いよ、凄いよ！ 私っ、大きくなったらお兄ちゃんと結婚するう　！　……どうだっ！？
最高だろウィリー！」

「ちょ、マジやめる。お前声でかい。もうちょっと静かに喋ってくれ。そして、大きくなっても兄妹は結婚できないぞ」

「？ 何でだ？ 私は馬鹿だからそのへんも詳しく頼む」

「法律で決まってるんだよ。だから、お前のキャラは根底から間違っている。そもそも現実世界にブラコンなどいない」

「お兄ちゃん。私と法律どっちが大切なの？ この後のサービスタイムの中でお兄ちゃんは私と法律どっちとるの？ ねえ、答えて？ 法律なんて、無視しちゃえ」

ビスケットはうるると目を潤ませてそう言った。

やばい！

萌える！

「うおう……。いかん、ビスケットで法律無視しそうになった。いや、でもそれは違うだろ。法律云々の前に規制がかかっちゃう」

「あああ。この国は変なところで厳しいな。児童ポルノなんてどうでもいいだろ」

「ビスケットさん。ここ、舞台はドイツです。極東の島国じゃありませんから」

「では、お兄ちゃん、抜きます」

「何貫こうとしてんだよお前。朝から変な話をするな。気持ち悪い」

「そうか、ウィリー。じゃあ、学校着いたら保健室行こう」

「じゃあって、何をジャアした？ 結果として話題変わってねーじやんかよ」

「いや、ウィリーが気分が悪いというから先生に診てもらおうかと思っただが、無駄な気遣いだっただか？」

「……もう、いいよ」

「？ そうか。ウィリーは変な奴だな」

「お前に言われたくない」

そんな会話をしながら登校をしていると。

ある物が目に止まった。

「バスケット。あれはなんだ？」

「あれ？ あれとは一体どれだ？ それか？ それともこれか？」

「こそあど言葉だけで会話を進めるな。つーかこれって何だよ。何で小指立ててるんだ」

「分かった。あれの事だな。近付こう」

「分かったの？ 読んでも人は全く分かってないけどいいの？」

「ウィリー、内情の説明は必要ない。私達はコレのみに没頭すればいいんだ！」

ビスケットはそう言い放った。

確かに、そんな事ばかり考えていたら話が一切進まないだろう。ある程度の理解をして頂きたいものだ。

「そうだな。じゃあ、近づくつても、靴は勝手に動くわけだし」
歩行を超電磁浮遊登校靴に任せ、二人はそれに近付いた。

遠目から見れば何か色の変なものかと思っていたが、違う。

近付けば近付くほど遠ざかりたくなる。

「おい、これ」

日常生活では絶対に無縁のかけ離れたモノがあった。

何を言えばいいのか分からない。分からないけど、とりあえず確認作業だ。

ビスケットの顔を見た。

「ウィリー」

ビスケットはそう言ってしゃがみこみ、地面にぶちまけられたそれを見た。

彼女の顔色は、青ざめている。

さっきまでのほんわかした雰囲気が一気に瓦解した。

「血だ」

地面に塗り込む様にまかれた液体は既に赤黒く変色し、固まっていた。

一体いつ、コレが着いたのかは知らないが少なくとも一時間以上前のものだ。

だが、それも分からない。

凝固剤を使えばすぐに固まるはずだ。

「ウィリー、凝固剤はほぼ使ってないと思うよ」

ビスケットは左 学校の方を指差した。

そこには、血が点々と続いている。

誰かが、血だらけになりながら歩いたようだ。

それが、永遠と学校まで続いている。

「凝固剤を使うとしたら、学校まで血が続くわけがない。犯人が使ったとしたらまず死体から処理するだろうから、こんな風に血が続くわけがないよ」

「じゃあ、犯人が学校まで運んだって事は無いのか？」

尋ねるとビスケツトは首を横に振る。

「その可能性もあるけど、わざわざ通行人に見つかるリスクまで犯してすることだと思う？ 私だったら車で運ぶぞ」

……正論だ。そういう場面はアメリカの大人気ドラマで何度も見たことがある。

「……言われてみればそうだけど」

「おそらく、殺人事件だと仮定するならば。犯人はおよそ一時間前にここで被害者を何らかの形で殺そうとした。被害者は倒れ動かなかったため犯人は殺したと思い逃走」

「だけど、実は死んでいなかった」

すると、ビスケツトは僕を指差して「そう」と。

「被害者は犯人が去ってまもなく立ち上がり学校に行った。そうなるね」

「いや、おかしくないか？ 何で警察呼ばないんだよ。つか、何で学校に行く必要があるんだ？」

「そのことは私だって重々承知だ。……被害者はどうして学校に向かったのか……」

「とりあえず、警察呼ぶか？」

僕は携帯電話を取り出してビスケツトに言った。

だが、ビスケツトは。

「いや、もしかすると警察も救急車も呼ばなかったのは何か理由があるのかもしれない。そもそも殺人事件ではないのかもしれないだろうし」

「まてまて！ その方がありえねえよ。何で警察を呼ばなかったのなんて携帯が無かったただけかもしれないだろ」

「そうか？ 私だったらそここの家に駆け込んでるはずだ。『襲われました。警察と救急車をお願いします』って」

「いやでも。コレが何か事件性のあるものには変わりないぞ！」
それでも、ビスケットは警察を呼ぶのを許さず。

「違うんだよウィリー。コレはどうして被害者が警察や救急車を呼ばなかったのか、ではないんだ」

これは、どうして被害者は学校に向かったのか、なんだ。

と、ビスケットは何かを確信しているように言った。

「まあ、いや。それもそうなんだけど……」

「とりあえず、学校に行こう。何か絶対にあるはずだ」

「……あれ？」

僕は、足元を見た。

「血が……」

「どろしたウィリー。早く行こう」

「いや、待てよバスケット。血が」
僕は何とか説明しようと、足元を指差す。

「血がどうしたと……っひうつっ!?!」
バスケットは、女の子らしいかわいい悲鳴を上げた。

素になったらやっぱりコイツも女の子なのか。

ってそんな事はどうでもいい。

「　　ない……そんな馬鹿な?」
さっきまであった血が、跡形もなく消えていた。

「お……おいウィリー。学校に続いでる血が……」
バスケットは震えながら指差した。

「どんどん消えていくぞ……?」
続けて口を押さえ、

「ウィリー!　なんだこれは!?!　ありえない!　どういふことなんだ!?!　説明してくれ!」

バスケットは急に僕にしがみついて来た。

「いや、分かんないよ!　僕が説明して欲しいよ!　っーか離せ!」

「いやだ!　怖い!　ありえない!　怖いんだ!」
バスケットはカタカタと震えながら泣きじゃくる。

コイツ、落ち着いていたと思ったたら違った。そういえば、血を見たときかなり青ざめてたな。やっぱり、あの時から怖かったのか。

そりゃそつだ。こんなに大量の血を見て平常心を保てる方がおかしい。

僕だって最初訳が分からなくってビスケツトに助けを求めていたじゃないか。

こんなに、怖がるビスケツトに。

「……ッ！」

自覚したら、自分がかかり愚かだと思った。

『僕が説明して欲しい』？

馬鹿じゃないのか？

逆だろう。

何で僕が頼ってんだよ！

何で僕が安心してしようとしてるんだよ！

「大丈夫だビスケツト」

だったら、僕がやる事は彼女を安心させる事。

不安定な状況で不安定な彼女を。

「行こう。学校に」

僕はビスケツトの手を握り、学校に向かう。

どうせこの程度しか出来ないのだから、この程度を目一杯がんばる

う。

「……うん」

ビスケットはまだ若干怖がっているが、それでもうなずき返してくれた。

それだけでも十分だ。

「分かった」

僕は彼女の手を引き、血の続く学校に向かった。

5 「死者は笑わない。」 (前書き)

5 話目だよっ

ピクシブもやっていますっ。

ピクシブではもっと進んでいます。

5 「死者は笑わない。」

5

校門まで僕とビスケットは何も話さなかった。

「血は、完全に消えてるな」

学校に着いたときには、今まで通ってきた道の血は完全に消えており、学校にも一滴も付いていない。いつもの、変わり映えのしない馬鹿でかい校舎だ。

「ウィリー。これじゃあ、血が追えないぞ……」

ビスケットはいつもの学校を見て少しは気が元に戻ってきたらしく、いつも通りの口調で言った。

「そうだな……」

僕はそう呟いて、校内に入った。

「ウィリー、何処に行くのだ？ まだ、誰も来ていないっばいぞ？」

「それならそれで都合がいい。誰もいない方があんな血を、……いや。よそう。今は探す方が優先だ」

僕とビスケットはそのまま靴を履き替えるため、昇降口に入った。

自分の靴箱に超電磁浮遊登校靴をしまい、超電磁浮遊上靴 通称、浮きわ靴 を履いて、校舎の一階ホールに来た。

「それにしてもお前、靴でかいな」

なんか、僕のより大きい気がする。

「うん？ あああ、私の靴は二十七あるからな。普通の一般女子の平均サイズを大きく上回ってるかもな」

「え、まじで？」

僕は二十六だ。一センチも違うの？ 身長差は二センチなのに？

だが、身長や足のサイズに負けたからと言って拗ねるウイズリー・リルベルトではないのだ。

そんな小さな奴じゃないぞッ！

「あれ？ ウィリー怒ってるっぽいな？ 私に負けているのがそんなに悔しいのか？」

「はあ？ そんな小さなことで拗ねるほど僕は小物じゃありませんよ」

「いや、拗ねてる。ふふん。ウィリーはまだ子供だなア」

「なんだと怖がり」

「言ったなチビ」

「血液恐怖症」

「いや、それは違うぞ。あの時は、シチュエーションがシチュエーションだったからな。道端にぶちまけられた血が、一瞬にして消え

去るなんて予想だにしていなかった。あれは驚いたけど、まあ。思い返してみればそんなに驚くほどでもなかったかな」

「嘘つけ。泣いてたじゃねーか」

「あああ。あれはあくびだウィリー」

と、ビスケットはしれつと言う。

……怪しいな。

「なあ。ビスケット」

「うん？ どうしたワイ」

「つぎやああああああああああああああああああ！！！！！！」

「つきやああああああああああああああああああ！！！！！！？？？」

僕がいきなり大声を出すと、ビスケットは思いつきりビビった。

「って、めっちゃビビってんじゃねーか！」

「いやっ！ それは反則だ！ いきなりは誰でもびっくりするって！！」

「驚かす方より怖がる方の声大きい時点で、驚かした方の勝ちだぜ」

「まあ、私はその程度じゃ驚かないけどな」

「驚いたって自分で言ってたじゃん」

「驚かないけどな」

……繰り返した。

「うわっ!?!」

「ひうえ!?!?!」

僕が今度はビスケットの後ろを指差して驚いたふりをした。

すると、案の定ビスケットは可愛らしい悲鳴を上げて地面に入り込んだ。

「ううう……だから、いきなりはやめてよう……」

目に涙を溜めてこちらを見上げてくる。

美少女＋涙＋上目遣い!?!?

何か、体の奥から熱くこみ上げる!

「分かったよ。悪かった」

僕はビスケットに手を差し出す。

「ほら、立って」

すると、ビスケットは僕の手を掴んで「んしょ」と立ち上がった。

「で、ウイリー。どこを探すんだ?」

目にたまった涙を拭いて尋ねてくるビスケット。

「とりあえず、SSSクラスだ。僕のカンが正しいならば、もしか

すると、もしかするかもしれないしな」

「そうか。じゃあ、急ごう」

ビスケットと僕は廊下をなるべく音を立てずに移動し、教室に向かう。

「なんで、SSSクラスだと思うの？ 他にも候補があるだろう。まさか、私らのクラスが関わっているのか？」

「そうじゃないといいんだけどな」

SSSクラスは、さっきいた本館第一棟一階昇降口前ホールから約二百メートル程離れた本館第三棟三階の一番奥にある。

二人は本館第三棟に着き階段を無言で上る。

そして、第三棟三階の奥から三つ目の教室がSSSクラスになって……！？

「うっ！？」

「何……これ？」

酷い悪臭が僕とビスケットを襲う。

腐った生ごみを三倍に凝縮したような。

不快な悪臭だ。

「……行こう。この階に間違いなくいる……うっ！」

「分かった。だけど、ウィリー。この臭さは異常だっ！」

ビスケットは鼻を押さえ苦しそうに悶える。

腐敗臭か、これが。

二人はSSSクラスに向かって歩き出す。

教室に近づくにつれて悪臭は濃さを増して行き、我慢できなくなったビスケットは窓をあけて新鮮な空気を吸う。僕も窓に近寄り、肺の中の空気の洗浄作業に勤しむ。

だが、そんなものは気休め程度。次々と鼻腔内を襲撃する匂いは、空気の入替えでは防ぐ事などできず。すぐに肺の中は腐臭で一杯になる。

「ウィリー……吐きそう……う」

「おいっ！ がんばれ！ 何をがんばるのかは分らんが、お前は吐いちゃいけない気がする！ 僕ならいいと思うけど、ビスケットはダメな気がする！」

しかし、ビスケットの口と不快指数は既に限界を超えており、決壊直前だった。

「いや、むりんぼろろろおおー！」

「いやあああ！ ビスケットやめっ！ うわっ！ 臭い！ この匂いの中でもにおぼろろろろー！」

「うっうっうう。余りの臭さに私ウィリーの目の前で吐いてしまったうっろろろろろ」

「まてっ！ それ以上吐くのはやめろろろろお」

しばらく、その場で二人して胃の中身をぶちまけてしまった。

マジで、きつい。

死にそうだ。

「バスケット！ だ……大丈夫か!？」

「いやっ。ううう……全然大丈夫じゃ……」

「ちよ、とりあえずここから出よう。無理だつて。絶対死ぬ」

そう言つて、口を押さえげんがりしているバスケットの手を引っ張つたが。

「待つて、ウイリー。あれ、見て……うっ」

「ああ？ 何を見るんだよ」

バスケットが死にかけた目をしつつ、右手の指をその方向に向けた。

「……！！ 血だッ！」

SSSクラスのドアの下の隙間から少しだけ、赤い液体が見える。

「行こう、ウイリー。ここまで来て引き返したら、私のゲロはどうなるんだぼろろおおおううっえ」

「吐きながら言われてもっ！ ……でも、お前の言つとおりだ。少しこの臭いにも慣れて来たし、あと、半分だし」

「そつだ、ウイリー。あとちょっとどどぼぼぼろろろえええうえ」

「ちょ、もう吐くのやめろ！ 僕はもう慣れて来てるんだから、ちよつと我慢してくれ！」

「う……うん」

バスケットは白目になりながらも、理性だけは何とか保ち、うなずいた。

こんな状況でも自分を忘れないのか。

流石だな。

そんな、褒められるような事でもないけど。

「う」

腐臭、腐臭。

おいおい、どうして学校の連中は気付かないんだよ。ありえない位にやばいぞ。なんか腐った生ゴミを食料としているゴキブリの大量の死体の中を這いずり回ってるみたいだ。

本気で昇天しそう。あと、教室までの何十メートルが異常に遠い。普段は走って十秒かからないのに、既に一時間が経っていきそうだ

隣のバスケットは吐くなと言っているのに顔の耳以外の穴から絶えず液体を流し続け、今にも死にそうな表情をしている。だが、それでも教室に向かおうと動く足のスピードは変わらないし、目の色は更に力強さを増してさえある。

「あと、ちょっと……!!」

目測およそ十メートル。赤い液体は、先ほどの校舎前に続いていた血とは違い、流れ出る量は増え続け、僕たちの靴を湿らせる。

やはり、ビスケツトが言ったように。これは血だ。しかも、まだ新鮮さが残っている。

そして、ついに教室のドアに手をかけ赤く染まった部屋を見た。

「……!?!」

何？

何だコレは？

何が、ここであつた!?!

「ウィリー、ど……どうしたんだ……?」

っ!!」

遅れてきたビスケツトも、言葉を失つた。

そりゃそうだ。一体、何処の世界にこの光景を見せられて固まらない人間が居ると言うのだ。もしいるとしたら住所・氏名・電話番号とご希望のコースを選び、下記の住所まで送ってもらいたいとかふざけている場合じゃない。これは、やばすぎる。R 18G 指定だ。

そこには、何の変哲もない教室 の中心正面向かって北側に設置された黒板に。

「え……エレナ……?」

そこには、昨日僕に告白をして、僕をフった、エレナ・キャロツト。

の、真っ赤に染まった死体が貼り付けられていた　！！

「嘘だ嘘だ！　な……なんだよこれ！　何時の時代だよ！？」

しかも、ただ真っ赤に染まってるだけじゃなかった。

学び舎の、皆のノートである黒緑の黒板の中央の上よりに、エレナの両手が重ねられるようにして直径五cm程の釘で留められており。首には二本のナイフが交差されるように刺さっている。さらに華奢な両足は力なく伸びてどちらの足も、めちゃくちゃな方向にひん曲がっていた。

中でも強烈なのが胴体　その機能は十分に発揮されていない。胴体というには、中身がほとんど無いからだ　は無造作に切り開かれ教卓に中身がぶちまけられている。

右胸の、丁度心臓辺りには何度も打ち込まれたであろう杭が刺さっており、そこから絶え間なく血が流れ続けている。

「うい……りい。こ……怖いよ。何よ、こんなやつ。い……いやあああああー！」

バスケットは、その場に崩れ落ち頭を抱えて泣き叫んだ。

「ビッ……バスケット！　だ……大丈夫か！？」

いや、大丈夫なもんか。こんなの、こんな状況、発狂して当然だ。僕でさえ、今すぐに頭を打ってその場に眠りたいくらいだ。しかし、眠り込む暇も無い。それに、こんな所で寝たら血が気道を塞いで窒

息死する　　って違うよ！　この状況でなお、ボケていられる自分がとてつもなく恐ろしいよっ！！

「だいじよば無い！　怖い怖い怖い！！　いっやあああああああああああっあああ！！　帰りたい！　助けてっ！　ウィリー助けて！　怖いよー！！」

ビスケットは頬を濡らして、僕に抱きついてきた。

そして、その。

「　さっ」

瞬間、全てが停止した。

「うるさい」

な、誰だ？　今誰が喋っている？

「ウィリー君。おはよう」

後ろから、聞き覚えの声があった。

この声は、やはり最近聞いた声だ。

しかし、僕は今ビスケットのほうを向いている。先ほど、黒板を見ていた僕に後ろからビスケットは抱き付いてきたため、今は僕の背後には黒板しかない。

じゃあ誰が？

決まっている。

僕は、後ろを振り向いた。

「私に会いに来てくれたの？」

エレナ・キャロットは、内臓を全て出され、手足はぐちゃぐちゃにされ、気道をナイフで塞がれ、心臓を潰されているのに。

笑顔だった。

5 「死者は笑わない。」（後書き）

そろそろ、終わります。

僕は閲覧数が少ない でも書こうかな。

6 「狂気に飲まれないように。」 (前書き)

さて、次で終わります。

楽しかったよー、書いてて。

コメントとかあったらください。

では、ウィリー君に待ち受けるものは……!?

6 「狂気に飲まれないように。」

6

私はエレナ・キャロットです。

突然ですが私が生まれた日の話をしましょう。

私自身もあまり覚えていませんが、この世に命を授けられた瞬間
重い病気にかかったらしいです。お母さんやお父さんはひどく悲し
みました。それを聞いた私も悲しくなりました。

お母さんはイギリス中の病院にかかりましたが全て答えは「今の
医学では治せない」と言われ、お父さんは知り合いの魔術師に頼み
込みに行きましたが「これは魔法では治せない」と言われました。

そう、私は不治の病にかかっていたのです。

医者には余命二年半と言われてしまいました。

頭に血液がたまり続けると言う謎の病。

私の昔の写真見ますか？

みんな、「気味が悪い」と言いますから見せませんけど。

しかし、お母さんとお父さんは二年半、あきらめませんでした。

国内だけではなく世界中の名のある病院、名のある魔術師にアプ

口下手し続けました。

それでも、現実には残酷です。

返答は全て拒否。

そうこうしている内に二年半が経ち、三年が過ぎました。

既に余命をきってしまったっている私の頭はいつ破裂してしまってもおかしくありません。

お母さんとお父さんはそんな私を見ていつもこう言います。

「じめんなさい。」

ある日、いつもの様に大きな頭を支え、朝食を両親に食べさせて貰っていた私はとんでもない激痛に教われました。

ついに、その日がやってきたのです。

目の前の惨状にお母さんは絶叫し、お父さんはその場に倒れました。

辺りには大量の血液が撒き散らされ、チューブ状のよく分からない物体が散乱したと聞いています。詳しくは知りません。ただ、私の頭は破裂してしまっただけという事実だけは覚えています。

しかし、私は死にませんでした。

撒き散らされた血液は徐々に消えていき、チューブ状の物体も塵となつてすぐに消えました。更に、破裂して修復不可能となつていた私の頭は、少しずつ元ある形に戻つていくのです。

そして、お母さんとお父さんはその異様な光景を目の当たりにして。

「だ……大丈夫だよ。お母さんお父さん。痛くないから安心して？」

その日から、お母さんとお父さんの態度は激変しました。

朝、起こしに来てくれません。

服を脱がせてくれません。

顔を洗つのを手伝つてくれません。

朝ごはんを作つてくれません。

お勉強を教えてくださいません。

テレビを見させてくれません。

近所の子供たちと遊ばせてくれません。

ロクにトイレに行くのも許しません。

歯磨きもしてくれませんか。

昼ごはんも作ってくれませんか。

石鹸を使わせてくれませんか。

一緒に出かけてくれませんか。

お外で遊ばせてくれませんか。

本を読んでくれませんか。

折り紙も教えてくれませんか。

お風呂も入れてくれませんか。

晩ごはんも作ってくれませんか。

おかしやおやつを与えてくれませんか。

お手伝いをさせてくれませんか。

良い事をして褒めてくれませんか。

悪い事をして怒ってくれませんか。

夜寝るとき子守唄を聞かせてくれませんか。

私に話しかけてくれませんか。

泣いても構ってくれません。

笑っても笑ってくれません。

怒っても正してくれませんか。

学校に行く時見送ってくれませんか。

教科書を買ってくれませんか。

鉛筆の使い方を教えてくれませんか。

挨拶の仕方も教えてくれませんか。

お弁当を作ってもらえませんか。

放課後、友達と遊ぶ事も許しません。

水筒も持たしてくれませんか。

雨が降っても傘を使わせてくれませんか。

転んで帰ってきてもらえばんそうこうを貼ってくれませんか。

はさみの使い方を教えてくれませんか。

数の数え方も教えてくれませんか。

学校で起きたことの話を書いてくれませんか。

私を見てくれません。

それでも私はそれが普通だと思っていました。

親は、子供に酷い事がないと何もしてくれないと、思っていました。

そう、私にとってそのような非日常は、何の変哲もない皆さんと大差ない普通でいつも通りの日常でした。

だから、私は感謝しています。

両親には感謝したりないほど、感謝しています。

両親には恩返したりないほど、恩返しします。

私は、恩返しのために一生懸命勉強しました。なぜかと言うと、どっかの誰かさんが言ってたからです。『勉強が子供の仕事』だと。

毎日仕事にまい進しました。

そして、中学受験でドイツのミュンヘン州にある聖ダイア魔法学校中級校一年超特待クラスSSに合格しました。世界でNo.1の偏差値を誇るとてもすごい学校です。

ありがとう、お母さん。

ありがとう、お父さん。

「ありがとう、お母さん、お父さん！ おかげで、私はとても幸せです！」

合格発表の次の日、お母さんとお父さんは二人とも首を吊って死んでいました。

「あれ？」

* * *

そう言って、エレナは顔を暗くした。

まさか、彼女にそんな過去があったなんて……僕は、彼女の何を見ていたんだ！？

必死に助けを求めていたじゃないか。それを、僕はわざわざ丁寧に断って……！！

「 どうして、お母さんとお父さんは死んだのかな？ 」
エレナはそう僕に問いかけた。

すると、話を聞いて落ち着いたのか、ビスケットが立ち上がった。

「どうしてって、分かっているのか？ エレナ、お前は何か」

「あなたには聞いてないわ。私はウィリー君に聞いてるの。余計な首を突っ込まないでくれるかしら？」

体の機能をロクに果たしていない体でエレナはそう言った。

「ね、どうしてだと思っ？」

そんな体でもエレナは意に介さず、好奇心旺盛な目で僕を見た。

どうして、そんな顔が出来るんだ……。

「少なくとも、エレナは悪くない……」
そう答えた。

答えとしては相応しくない答えを。

「……そっか。ウィリー君もそう思っただね。ありがとう、おかげで目が覚めたわ」
嘘をつくエレナ。

本当は違っただろ？

「じゃあ、この胸に刺さってる奴抜いてよ。とりあえず、こんな風に普通に話せてるけど本当はすごく痛いから」

「……分かった」
僕は一歩ずつ、エレナに近付いた。

「うっ　！？」

教卓の上の内臓の様なものが、実は少し波打っている事に気が付いて口を押さえる。

それにしても、臭い。

やはり、エレナの腐敗臭かよ……っ。

「あっ、ごめんね？　やっぱり臭いがきついかな？　ごめんね？」
謝ったエレナに。

急に何かを言いたくなった。

どうして

「　謝るんだよ」

「え？」

聞こえなかったようで、エレナは僕に聞き返した。

「どうして、謝るんだよ」

「ど……どうしてって」

「分からないのか？　お前が謝る必要はないって言ってるんだよ」
後ろでバスケットが「ウイ……ウイリー？」と心配そうにおろしている。

「お礼を言う必要もない、謝る必要もない。誰からも、お礼を言われるような事もしてないし、お礼を言うような事もしてねーじゃね

「か」

エレナは、もう心が捻じ切れている。

普通こんな状況で、謝ったりしねえよ！

「何？ 何が言いたいのか？ どうしちゃったの？」

「何も。ただ僕が言いたいのは」

エレナの心臓に刺さっている杭に僕は手を出した。

「僕は、お前が嫌いだ。だから、相手してやる」

「あら、ありがとうウィリー君。うれしいわ。私が一番やってみた
い事なの」

そう言って、僕はエレナの杭を引き抜いた。

さあ、始めよう。

僕は、お前の心を取り戻そう。

7 「読もうっ。」（前書き）

これが、ただしタイトルです。
読もう。

読んでください。

そして、見てください。

では、この辺で。

7 「読もうっ。」

7

ここは一年超特待生クラスSSSの教室。

いつもとなんら変わらないこの教室は今、戦場に変わろうとしている。

「じゃあ、エレナ。これ引き抜くから、我慢しろよ?」

僕はそう言っただエレナの心臓に突き刺さる杭を持つ。

血で真っ赤に染まった杭は少しふやけていて肌触りが気持ち悪かった。

「うん、大丈夫。思いつき引き抜いちゃって、痛くないと思うから。ううん、それでも痛みはあるかもしれないけど我慢できる。だって、ウィリー君がやってくれるんでしょ? だったらどんなに痛くても、どんなに血が出てても我慢するから」

その答えにビスケットが少し反応し顔を赤らめた。

今の会話のどこに恥ずかしい所があるんだ?

「我慢しなくても、いいんだけどな」

え? とエレナが聞き返したけど、無視して僕は一気に杭を引き抜いた。

杭はかなり奥深くまで刺さっていて、周りの筋肉の繊維が大量に

巻きつき引つ張るたびにぶちぶちと、痛々しい音を上げる。血も先ほどとは比べ物にならないほど大量に噴出し、この小さな体にどれ程の強さがあるのだろうと思った。

だけどな、エレナ。

その強さは、薄っぺらいんだ。

その強さは、破れやすいんだ。

その強さは、強さじゃない、単なる弱さだ。

こんなに、痛々しく。こんなに、惨たらしく。こんなに、おぞましい事が。

我慢できるようなもんじゃないんだ。

お前は、強いんじゃない。お前はお前自身の弱さに耐えて、弱さから自分を守って、弱さの自分から切り離してしまった。だけど、それで強くなるとは限らないんだよ。

弱くないから強いんじゃない。お前が、振舞っているのはただの強がりだ。

弱さと言う強さを捨ててしまった時点で、もう強さを捨ててしまってる様なものなんだよ。

「エレナ だから」

僕は、杭を彼女の体から抜き取った。

ズルンと、不気味な音を立て杭はそのまま地面に没落した。

杭を抜く間、エレナは一切の悲鳴を上げずに必死に耐え抜いていた。

「ど……どうなったんだ？ ウイリー？ エレナ？」
ビスケットは動かないエレナと僕を交互に見て、戸惑っている。

しばらくして、エレナの体が高圧電流を浴びせたかのように大きくビクンツ！ と痙攣した。ビスケットはその動きに驚いて「ひッ！？」と一歩後退する。

「エレナ、痛くなかったのか？」

僕は、まだ動かないエレナにそう問いかけた。

すると、彼女はもう一度痙攣して、それから何度も体を震わせた。

僕と、ビスケットがその光景を目にしたとき、言いよつの無い不安が体中を駆け巡る。

「ッ！！！？」

完全に折れ曲がった両足は歪な動きをしながら元の形に再生し、飛び出た数々の内臓は開かれた胴体に吸い込まれるように戻っていく。

そして、壁に縫い付けられるようにして手に刺さったナイフは無理矢理引き抜かれ、開いた腹も動画を逆再生したかの如く塞がれる。

先ほどまで大量に流れていた血液はいつの間にか蒸発し、彼女はふわりと、実にきれいに教室の床へと降り立った。

「んっ。はあ〜……。あああ、生き返ったあああ。って、あ。コレも忘れてた」

エレナはそう言って首に刺さった一本の包丁を両手で持ってズボボツと引き抜いた。

エレナはそのまま教卓の上に座り、足をプラつかせながら、

「ありがとう、ウィリー君。全然痛く無かったよ。だって、体の痛みだもんね」

彼女は笑っていた。

* * *

「体の痛み、ねえ。じゃあエレナ、心は傷むのかい？」

「うん。私は、心が傷む。どうすれば、解消できると思うっ？」
彼女は無垢な瞳でそう聞いた。

「だから、相手してやるって。お前の心が晴れるまで、心の痛みがなくなるまで、心身共に相手してやるよ」

「本当？ ありがとう。ウィリー君って、やっぱり優しいんだよね」

「自覚した事は無いけどな。だけどエレナ、これだけは置いて置く。僕とお前は、お互いがお互いに」

「大っ嫌いだ」

僕とエレナは言葉を八毛らせた。

息ピッタリである。

「ぶっ。あはははは！」

「ふふふっ、あははははは！」

二人して笑いあう。ビスケツトが隣で首を傾げるのも無理は無い。

「じゃあ、始めるぞ？」

「そうね始めましょう」

エレナは自分の両手を黒板に留めていたナイフを拾い上げて、僕に突き出した。

「おいおい、いきなりそんなもん取り出して　おい、ビスケツト。教室から出た方がいいぞ？　危ないから」

ビスケツトは僕の方を見た。視線から心配してくれているのが分かる。

「僕なら大丈夫だ。死ぬことは無いと思う」

「そうだね。じゃあウィリー君は教室から出ないの？」

エレナも賛同する。同時に質問する。

「ああ。じゃないとお前のためにならない。だからビスケツト、廊下で僕たちを見ていてくれ。万が一、僕が死にかけたときは救急車よろしく」

そうして、ビスケツトは首を立てに振った。

「……ウィリー、死ぬなよ？」

ビスケツトは心配そうに再び僕の眼を見た。

僕はもう一度「大丈夫だから」と返して、ビスケツトを廊下に出した。

さて。

「始めよう、エレナ。先にそっちから来ていいぞ？」

「いいの？ あんまり見くびらないで欲しいかも」

エレナはそう言っただけでナイフを構えなおす。

「レディー・ファーストだ。先手は譲ろう」

僕が言い終えた瞬間に、エレナはもう駆け出していた。

「お言葉に甘えて」

そんな言葉を置き去りにして、いつの間にか僕の目の前にまで来ていた。

反応する暇なんてまるでない。疾風の如く僕に体を密着させてきたエレナはもう一度、精一杯の笑顔をつくって　ちゅっ。

彼女は、僕の口に背伸びするようにして唇を付ける。

「ファーストキスだよ。そして、プレゼント」

ズンツと体を一瞬だけ強く揺さぶられたような感覚がした。

まるで、異物を体内に突き込まれたかのようなそんな、感覚が。

「ウイ……ウイリー!!!??」
ビスケットの叫び声が耳の中で反響する。

ああ、足を、大腿を刺されたのか。次第に、体に痛みが浸透してくる。

「ウイリー君、私の強さだよ。私の一部だよ。どう？ 痛い？ でも、私自身はこんなものじゃないから。もっと酷くて、もっとどろどろしてる」

エレナは僕を抱くように、口を耳元に近づけてきた。

「ぐっ!? 足が……っ」

痛い。段々、小さな痛みが大きくなっていく。徐々に激痛へと風変わりしていくのが分かる。どんどん血が流れ出ていくのも、感覚が無くなっていくのも、全て手に取るように分かりやすかった。

「大丈夫？ 痛いよね。多分、言葉に出来ないくらい。でもね、私はもっと分かってもらいたい。ウイリー君に私をもっと知ってもらいたい」

そう言ったエレナは、まだ足に刺さっているナイフを捻りながら引き抜いた。

「っひぐああああ!!!??」

情けなく声を上げてしまう僕。

「ごめんね、我慢して」

彼女は今度は背中に手を回し、中心部分を貫いた。

「ッッ……!!!」

「痛いのか？ 今どんな気持ち？ 痛い？ 怖い？ 憎い？ 悲しい？ 苦しい？ 大丈夫だよ。私は、それよりもっと酷かったもの。多分、泣き叫びたいくらいだよね？」

そうさ。

泣き叫びたいほど痛い。

「そうさ……。だ……。けど、お前は泣かなかったじゃねーか……！」

「ううん、私は泣いたよ。いつだったかな。初めて、他人に助けを求めた日があつてね、それで見限られちゃったせいで、私は泣いたの」

「……！？ エレナ……。それって……」

すると彼女は「いいよ、ウィリー君のせいじゃない」と僕の体を再び抱きしめる。

「助けを求めた私が悪かった。いつものように笑って、耐えて置けばよかったのに。どうしてかな？ どうしても、ウィリー君に助けてもらいたかった。手を、差し伸べて欲しかったんだよ？」

段々と、体から血液が抜けていくのが分かる。頭がぼーっとして、ふらふらする。

「でもね、ウィリー君は無視した。私を助けなかった。そして、生まれて初めて悲しくなって、ふいに涙がこぼれたの」

こんな感情初めてだった、と付け加える。

誰が悪いのかな？

「エレ……ナ。それは……」

「言わなくていいよ。ウィリー君は感じてもらうだけでいいから。私を、私の痛みと傷みを」

そして、背中から無造作にナイフが抜かれた。

彼女はそのまま二、三步下がり改めて血に染まるナイフを構える。

「ウィリー君、能力使った方がいいよ。死んじゃうから」

「使わねーよ……！ それじゃあ、お前のためにならない」

エレナは、もう一度笑って

「ありがとう」

一直線に僕に向かってきた。

その刃先は完全に胸の辺りに向けられている。先ほどよりもスピードも力も段違いだ。刺さった瞬間、胸から背中へといるんな物がぶちまけられる様な感覚がして口から大量の血がこぼれる。

おそらく、貫通しているだろう。

そのまま、エレナの勢いは止まらず教室の後ろまでノンストップで叩きつけられる。ロッカーの上に積みまわっていた様々な本が崩れ落ち、辺りに散らばった。

「
ツツツ……！！！！！！」

激痛に悶え、身を捻らせる。

「……………っ！！！！」

廊下で、ビスケツトが何か叫んでいるようだが、聞こえない。

意識が途切れ途切れの中、僕はその場に腰がつく。

そして、エレナの顔が目の前にある事に気付き、その表情を見た。

「な……………いて……………るのか？」

しかし、エレナからの返答はなく、次第に視点も下がっていく。

ふいに、散らばった本の中に一冊の本が目についた。

錬金学書とか魔術書の中で、なぜこんな本があるか分からなかったが、僕はそれを手に取る。

「エレ……………ナ。お前に……………必要なのは……………僕じゃない……………」

最後の力を振り絞り、僕はエレナにこう尋ねた。

「お前に、必要……………な物は……………渡せないかも……………しれないけど……………
……………。とりあえずこれ……………」

エレナは、涙を流しながら僕の持っている物を見た。

え？　と言う顔をしているが、そりゃそうだろう。

「これって、ブレーメンの音楽隊……………？」

童話。

子供の頃には必ず一度は親から読んでもらう童話作品だ。

僕は精一杯の元気と笑顔を込めて。

「……読もうっ！」

そう、今のエレナに必要なもの。

それは、優秀な頭脳でも友達でもなく。

約十二年ぶりに、この十二年間エレナが貰う事のなかった。

愛情が必要だった。

* * *

しばらくして、といつかなんか時間感覚がおかしいな、と思い痛み体を起こしてみると先ほどの教室とは打って変わって白い天井が目に入った。

何だここは。僕は今まで寝ていたのか？ といつかここはどこだ？ そういえばエレナはどうなった？ いや、ここはどこだ？ 僕は何故寝ているんだ？ そもそもここはどこだ？

「病院だよウィリー、やっと起きたのか」
隣にはビスケットが座っていた。

何でお前がいるんだ、何で地の文を読むんだ。

「覚えていないか？ ウィリーはエレナの心を救うために闘って、ここに送られたんだ」

「ああ、そうだったな。救急車はお前が呼んだのか？」

「その通りだ。……全く、心配したぞ。あの後、気を失っちゃうから死んじゃったかと思って……」

「そうか、よく死ななかつたな……おい？ ビスケット？」

見ると、ビスケットは涙を流していた。

「心配したぞッ！ その、ウィリーが死んだら私はどうすれば……
って……ッ！」

怒っているのか泣いているのかよく分からん。

「……悪い、心配かけたな」

一応、謝っておくと、ビスケットはすぐにもとの表情に戻って

「あああ、分かればいいんだ。それより、何か食べたいものはないか？ 今なら私が腕によりをかけてフィンランドの伝統料理を振舞ってやるっ」

ビスケットは右腕に左手を当て力こぶを作る。

「いや、結構です。なんか怪しい」

「む、酷いな。ヒドイゾ。私はこの溢れんばかりのウィリーへの思いを一体どこにぶつければいいんだ？」

「まあ、その辺の壁にでもぶつけておけ。壁の包容力は凄いからな」

「おっと、そんな事をしたら壁が壊れてしまう。前回、試しに電信柱にぶつけてみたんだが、根元からぼつきり行ってしまった」

「そんな危ない波動を僕にぶつけようとしていたのか!？」

「大丈夫、大丈夫！ 大丈夫だから。ほらウィリー。今ベッドの上に寝てるから大丈夫だから。いや、ベッドじゃないと大丈夫じゃないから」

「余りにも大丈夫連呼していると全然大丈夫に聞こえない上に、ベッド以外の場所でやったら死んじゃうって事じゃねーか。危ねーよそれ。いや、お前が一番危ない」

「大丈夫だウィリー。心配しなくてもいい。リードは私がするから後のことは本能に委ねろ。きっと良くなるから」

「はいはい。じゃあ、購買でジュース買ってきて。もちろんお前のお金で」

「ほう、私をパシる気か。それには私の波動を」と言うよりウィリーの波動を私に打ち込んでくれ。充電が必要だ」

「そんなんで充電できるか！ いいから買って来い！」

「ふふん、なるほど。ウィリーはこういうプレイが好きなんだな。いいだろう！ ウィリーに見合ったメス豚野郎になって戻ってくるからしばし待たれよ！」

「とことん勘違いが凄まじいな！」

しかし、そんな僕の忠告を真面目に聞かずにビスケットは走り出した。

「……」

と、再び病室の扉が開かれた。誰だろう、と思っている。

「……エレナ」

「おはよう、ウィリー君。どう？ 調子は」

エレナは相変わらず笑顔だった。

「もう、見ての通り元気じゃないですよー。いつ、退院できるんでしょうな？」

「ふふつ。多分、二〜三週間くらいってお医者さんは言ってたよ。」

「一応、この件はウィリー君の自傷行為で話が進んでるけど、よかつたかな？」

「いいよそれで。つーか、何しに来たんだ？ お見舞いって訳でもないよな」

「あら、心外。それでも心配してお見舞いに来てあげたのに。ナース服で来た方がよかつたかな？」

「……」

「どうしたの？」

エレナは顔を覗き込んだ。

金髪ブロンドが鼻に当たりくすぐつたい。

「いや、そんな事言うんだなー、って思ってた
僕は顔を振って髪をどかす。」

「よかったな、エレナ。普通に戻れて」

「うん。ありがとう。迷惑かけちゃったね」

「気にすんな。僕のお節介と言う優しさがいい方に作用しただけだ
よ」

「ウィリー君らしいね。でも、お礼は言わせて」

「さっき言ったじゃんか」

「あら、痛いところ突くわ」

「……あははははは！」

「……うふふふふふ！」

二人して、なぜか笑う。

「ねえ、ウィリー君」

「どうした？」

「もう一度、お願いするね。私と、友達になってくれる？」

「あははは！ いやだね。僕はお前が大嫌いだし、お前は僕が大嫌

いだもん」

「あら、やっぱり？　じゃあ、質問変えるね」

「ぶっぞ」

「私と、付き合ってくれる？」

エレナはさっきと同じテンションで尋ねた。

そして、僕はこう答える。

「あははは！　いいよ。　さっきはお互いに大嫌いって言ったけど、結局、お互いに大好きだからな」

するとエレナは「そう」と言って。きれいに、しかし、どこか強くもある。

初めてのうれし泣きをした。

7 「読もうっ。」（後書き）

で、これで終わりです。

次回作は、気が向いたらかきます。

いくぜっ、あたしのあしたは絶望っちゆうー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3445z/>

魔法系男子と自滅的彼女

2011年12月11日21時51分発行